

個別最適な学びを実現させるための授業改善 ～児童・生徒の学びの実感を大切に～

国士舘大学文学部
教授 細越 淳二

ここでは、以下の3点から令和6年度の体育・保健体育授業の現状を確認し、個別最適な学びの実現に向けた改善点を整理する。
*高等学校は全日制の結果を取り上げた。

1 ICTの活用と授業改善

「TOKYO ACTIVE PLAN for students」のPROJECT 1では、デジタル技術等の活用による「教え方」や「学び方」の充実が目指されている。ここではまず、現在の小学校・中学校・高等学校におけるICT機器の活用状況を確認する（表1）。

表から、小学校・中学校・高等学校ともに90%を超える学校で「②授業の工夫・改善」のためにICT機器を活用していることがわかる。「①児童・生徒の実態を把握・分析」や「③運動習慣の確立・定着・改善」、「④生活習慣の確立・定着・改善」のための利用と比較しても、授業改善を目的とした活用頻度が顕著に高くなっており、授業中のICT活用が浸透していることが読み取れる。一方で、授業のどのような場面で、どのような活用がなされているのかについては本調査の結果からだけでは読み取ることができていない。授業の導入・終末場面でめあてや振り返りを記入するために使用していたのか、自己の課題や改善策を考えるために動画等を用いたのか、チームの作戦を考える際に作戦ボードとして用いたのか、あるいは学習のための資料を、タブレット端末を用いて検索したのか等、学習過程のどこにICT活用を位置づけることが児童・生徒の学びの促進につながるのかを確認することが大切であろう。特に中学校・高等学校では、分析ソフト等を用いて自分たちの動きを分析する「アナリスト」としての臨場感のある学びの楽しさを伝えることも「支える」「知る」に関わっては重要なことである。そのためにも今後は、各校種の活用実態を、より具体的に把握し、個別最適な学びを促進するための情報を共有することが求められる。

表1 小学校・中学校・高等学校におけるICT機器の活用状況

活用方法			
	小学校	中学校	高等学校 (全日制)
①児童・生徒の実態を把握・分析	66.4	58.4	50.0
②授業の工夫・改善	92.5	92.4	90.0
③運動習慣の確立・定着・改善	15.7	15.4	10.6
④生活習慣の確立・定着・改善	12.0	7.9	7.1
⑤活用していない	2.3	1.9	3.5

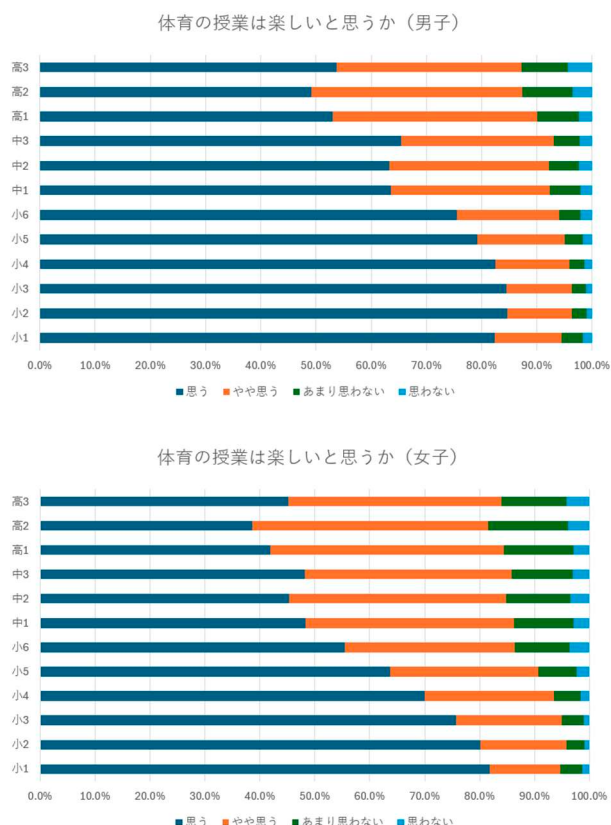
2 体育・保健体育授業の「楽しさ」の意識

図1は、体育・保健体育授業の楽しさについての調査結果である。図から、小学校・中学校・高等学校へと進むにつれて、体育・保健体育の授業を明確に「楽しい」と回答する児童・生徒の割合が減少し、「やや思う」「あまり思わない」「思わない」の割合が増加していくことがわかる。特に高等学校では、経年的にこの割合が低下している現状がある（報告書 p. 88, 89）。

体育・保健体育授業や運動・スポーツへの愛好的態度は、様々な活動への意欲の向上や運動を継続する意思にもつながることが期待される。生涯スポーツを志向し、豊かなスポーツライフを実現する意味では、社会に出る直前の生徒が体育・保健体育を「楽しい」と感じることは非常に重要である。

その点で、高等学校の生徒が保健体育を「楽しい」以外の回答をするようになる背景を見直してみることには大きな意味があるのではないだろうか。授業の内容が生徒の実態に合っていないのか、現在の生徒によりふさわしい（生徒の興味・関心によりフィットする）授業の方法（教材・教具、学習の進め方など）があるのか等、より丁寧に情報を集めて、生徒が「楽しさ」とともに、充実感や達成感をより多く得られる授業改善につなげていきたい。

図1 体育・保健体育の授業の楽しさについて



3 児童・生徒と教師の意識

表2は、児童・生徒が「できないことができるようになったきっかけ・理由」(全学年男女の平均)と、教師の「努力を要する児童・生徒がいる場合の取り組み」の回答を併記したものである。同様の質問が設定されているこれらの回答から、児童・生徒と教師の意識の実態をとらえてみたい。

表から、児童・生徒が達成のきっかけとして多く回答していたものは「授業中にコツやポイントを指導」「授業中に児童・生徒自らが工夫して練習」「教員や友達の真似」「友達同士で教え合い促進」であった。具体的に見ると、小学校では「教員や友達の真似」が最も多く、中学校・高等学校では「教師や友達の真似」「友達同士で教え合い促進」(高等学校ではこれに続いて「授業中に児童・生徒が自ら工夫して練習」)であった。

これに対して教師の回答を見ると、回答割合が高かったのは上記の4項目に加えて「その児童・生徒に合った場やルール等の用意」となっており、小学校ではこれらに加えて「授業中に自分の動きの動画を見る」が挙げられていた。教師の回答は、小学校・中学校・高等学校ともに「授業中にコツやポイントを指導」が顕著に高く、小学校・中学校では「友達同士で教え合い促進」が続き、高等学校では「その生徒に合った場やルール等の用意」が続いていた。

表2の色塗り部分(回答割合)を見ると、児童・生徒と教師が共通していたのは友達同士での教え合いであり、小学校・中学校・高等学校ともに友達同士の学び合いを大切にする中で達成感を感じる子どもが多い様子がうかがえる。しかし、教師が最も多く回答していたコツやポイントの指導、児童・生徒に合った場やルール等の用意は、児童・生徒の達成感の順位としては上位には入らず、児童・生徒が教員や友達の真似や、自ら工夫して練習したことで達成感を得ていることがわかった。

これらの項目は関連する(あるいは裏表の関係にある)ことも考えられるが、つまずきを抱える児童・生徒にとって意味ある指導を教師があらためて把握し、「指導の選択肢」を用意して授業に向き合うことの重要性を示唆していると思われる。

表2 児童・生徒と教師の意識

回答	小学校		中学校		高等学校 (全日制)	
	【児童の回答】 「できないことが できるようになっ た」きっかけ (全6学年男女の 平均値を記載)	【教師の回答】 努力を要する児 童がいる場合の 取り組み	【生徒の回答】 「できなかったこ とができるよう になった」きっ かけ (全3学年男女の 平均値を記載)	【教師の回答】 努力を要する生 徒がいる場合の 取り組み	【生徒の回答】 「できなかったこ とができるよう になった」きっ かけ (全3学年男女の 平均値を記載)	【教師の回答】 努力を要する生 徒がいる場合の 取り組み
授業中にコツやポイント を指導	29.7	88.3	37.2	84.1	36.1	89.1
授業中に児童・生徒自ら が工夫して練習	32.3	58.7	36.5	55.3	40.8	43.5
その児童・生徒に合った 場やルール等の用意	6.8	64.1	9.0	63.5	6.6	82.6
教員や友達の真似	42.8	44.9	54.7	42.9	41.0	37.0
友達同士で教え合い促進	35.4	84.6	57.7	75.9	44.5	69.6
授業中に自分の動きの動 画を視聴	6.3	62.0	9.4	36.5	3.5	28.3
授業外の指導	3.8	11.3	4.3	7.8	1.9	9.4
授業外の練習促進	20.1	13.0	14.8	6.5	7.1	6.5
授業外の時間に児童・生 徒が本や映像を見て勉強	7.1	21.4	6.3	12.9	3.6	6.5
児童・生徒の回答割合順位1位						
児童・生徒の回答割合順位2位						
児童・生徒の回答割合順位3位						

4 おわりに～学びの成果が今後につながる体育・保健体育授業の実現を

以上の通り、ICT機器の活用、教師の指導上の意識等、各校の教員がどのような授業の工夫や取り組みをしているのか、その一端を確認することができた。今後は、小学校・中学校・高等学校それぞれについて、より具体的にどのような工夫がなされているのか効果的な指導法(教材・教具の用意、学習過程の工夫、効果的な指導法〔例えば声かけの仕方、指導のタイミング等〕)についての好事例を出し合い、望ましい授業のゴールイメージとその手立てを共有することが、個別最適な指導の質を更に高め、より探究的な東京都の体育・保健体育授業の充実に向けても大切になるものと思われる。